

概要

富山地区における**中山間地域**では、農作物への鳥獣被害や生産者の高齢化が深刻で、地域の活性化が望まれるなか、他品目に比べ、小面積かつ省力的に取組開始できるシャクヤクが注目されており、富山農林振興センターでは、**薬用シャクヤク**と**切り花シャクヤク**のそれぞれの視点から産地体制構築を図った。

薬用シャクヤクにおいては、平成25年より地域生産組合を発足支援し、生産・出荷体制を整備したほか、省力多収技術の確立・有望品種の導入推進を図ったところ、安定生産が可能になるとともに、シャクヤクを契機とした中山間地域活性化に助力した。また、**切り花シャクヤク**においては、平成25年の出荷組合設立以降、集落営農組織へ導入を推進して産地が拡大したほか、マーケットインの産地戦略が優位販売に繋がり、作付面積・出荷量が拡大した（令和6年 250a・13.9千本）。

具体的な成果

1 薬用シャクヤクにおける産地体制構築と中山間地域振興

- 種苗供給・一元集荷体制による安定生産
- 省力多収技術の確立と普及
「**単収3+**モデル」作業時間は慣行栽培の約8割（353 hr→294 hr / 10a・4年間）へ削減（図1）
- 薬用シャクヤクを契機とした地域活性化に貢献
「**中山間地域協働モデル**」農村サポーターが地域交流のきっかけに
- 富山地区の薬用シャクヤク栽培面積が 3.3 ha（県内栽培面積の約5割）に拡大。



図1 作業時間の比較

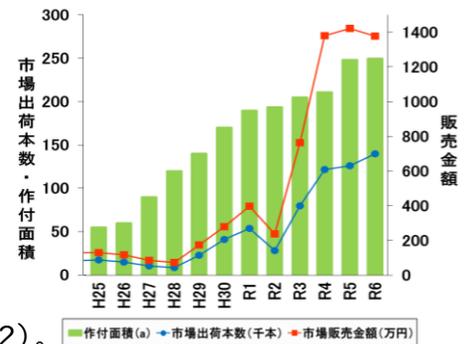


図2 切り花シャクヤク生産の推移

2 切り花シャクヤクにおける産地形成と拡大支援

- 主穀作中心の12集落営農組織が生産を開始し、**作付面積が5倍※に拡大**（※平成25年JAあおば花き出荷組合設立→令和6年現在、図2）
- 組合が生産する160品種の切り前をマニュアル化
- 簡易ハウスによる無加温栽培、マーケットインの産地戦略により、母の日の需要期出荷が可能となり、**出荷本数および販売額が向上**（図2）。

普及指導員の活動

1 薬用シャクヤク

平成25年
～令和5年

- 富山市・上市町の各地区において**地域生産組合の発足支援**、専用収穫機を導入し、**安定生産・出荷体制を整備**

令和2年

- 養液栽培システムによる肥培管理と黒マルチ・防草シートを用いた実証ほを設置し、**省力多収栽培を確立**

令和4年
～継続中

- **中山間地域協働モデル**として、農村サポーターを中山間地域に招致

2 切り花シャクヤク

平成25年
～令和元年

- 「**JAあおば花き出荷組合**」を設立し、普及指導員の提案により**花きを複合化品目として**、集落営農組織を中心に作付推進を展開

令和3年

- 新規生産者の早期技術習得のため「切り花シャクヤク栽培・収穫調製マニュアル」を策定

令和4年
～継続中

- **市場検討会**の開催・**出荷期間拡大**を目的とした簡易ハウス・無加温栽培の導入実証および推進

普及指導員だからできたこと

- ・ 主穀物生産額が農業生産額の約7割を占める富山県において、花きをはじめ園芸を担当する普及指導員が、現場の栽培技術から販売戦略まで、あらゆるテーマを普及の課題と捉え、生産者・JA・関連機関と高い精度で情報連携しつつ普及活動を行ったことで、的確に産地体制を構築することが出来た。

富山地区におけるシャクヤク産地育成

～「生薬」と「切り花」で身も心もウェルビーイングに～

活動期間：平成 25 年～継続中

1. 取組の背景

富山地区における中山間地域では、農作物への鳥獣被害や生産者の高齢化による耕作放棄地が発生し、高齢者や女性労力の活用による地域の活性化が望まれていた。当地域で、他品目に比べ小面積かつ省力的に取組開始できるシャクヤクが注目されるなか、富山農林振興センターでは、薬用シャクヤクと切り花シャクヤクのそれぞれの視点から、技術確立・組織体制整備・販売力強化を普及課題に位置付け、産地育成を図った。

2. 活動内容（詳細）

(1) 薬用シャクヤクにおける産地体制構築

ア 地域生産組合発足による生産・出荷体制の整備

生産振興にあたり、平成 25 年に富山市で「富山薬草生産組合」、令和 5 年に「上市町薬用作物生産組合」の発足を支援し、専用収穫機の共同利用体制を整えた（県単・薬用作物産地確立事業）。また、県プロジェクトチームに参画し、種苗の安定供給・一元集荷体制（図 1）の構築を支援した。

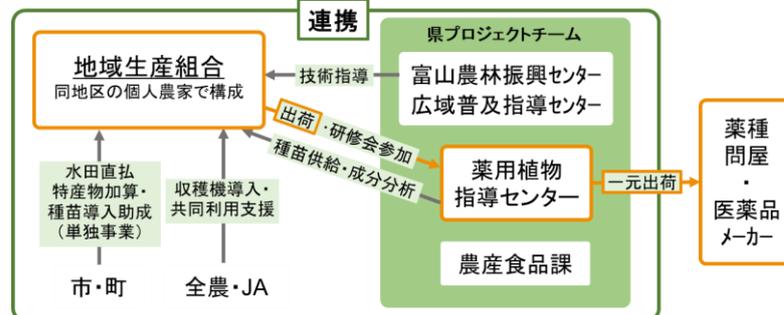


図 1 薬用シャクヤクの地域生産組合との連携イメージ

イ 省力多収栽培技術の確立

従来の手作業による効率の低い肥培管理を見直し、シャクヤク栽培の省力化と単収向上に向けた液肥施用体系の確立を図ったほか、黒マルチ被覆・防草シート敷設による除草対策の現地実証ほ場を設置した（写真 1）。



写真 1 薬用シャクヤクの省力多収栽培技術（左から、液肥施用システム・黒マルチと防草シート敷設ほ場・電動バリカンによる摘花）

ウ 生産者の収益性向上を目指した「富山シャクヤク」の導入検討

県くすり政策課と連携し「富山シャクヤク」ブランド品種に位置付けた‘春の粧’（写真2）を、平成30年に県内でいち早く導入し、省力多収栽培技術と組み合わせ、栽培3・4年目での切り花収穫と根の収量の両立に関する調査を行った。



写真2 富山ブランド品種‘春の粧’の切り花

(2) 切り花シャクヤクにおける産地形成と拡大支援

ア 切り花産地に向けた集落営農組織への作付け推進

切り花生産組織「JAあおば花き出荷組合」へ作付推進するなかで、JAあおばでは「花き」を基幹作物として新たに花き担当者を配置したことから、JAの営農相談員（写真3）と連携して、主穀作を中心とする集落営農組織に導入提案した結果、令和6年度末までに12の集落営農組織が、JAあおば花き出荷組合に加入し、新たに作付けを開始した。

イ マニュアル作成による技術習得支援

「しっかり咲くシャクヤク」を目指して、花き組合が栽培する160品種の切り花収穫適期調査を行い、市場ニーズに対応した出荷形態をまとめた「切り花シャクヤク栽培マニュアル」を作成、花き組合員へ全戸周知することで、新規生産者への技術の早期習得を図った。

ウ 市場ニーズに対応するマーケットインの産地戦略

市場での販売力強化を図るため、県内外9市場・JA・県関係機関による出荷検討会を開催支援する中で、出荷期間拡大の要望が聞かれた。そこで、簡易ハウスによる無加温栽培区の設置・実証（国・中山間地域支援事業、写真4）した結果、無加温促成栽培により出荷期間が2週間以上前進することを明らかにした。



写真4 切り花シャクヤクの簡易ハウスによる無加温栽培

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 薬用シャクヤク持続可能な産地体制の整備

- ・省力多収技術の確立により、作業時間が慣行栽培の約8割（353 hr→294 hr/10 a・4年間、図2）へ削減され、10 a 当たり60万円（4年目収穫時）の収益性が見込まれた。この成果を「単収3 tモデル」として、富山地区だけでなく県内各地へ波及した。



図2 薬用シャクヤクにおける省力多収栽培と慣行栽培の作業時間の比較 (hr/10a・4年)

- ・富山市や上市町は、生産組合設立と連動し、作付け助成等の取り組みを開始したことや、上市町ではシャクヤクを「町の花」に位置付けるなど、横展開を支援した。中でも上市町の「黒川・砂林開地区」は、地区外からの農業サポーターを募集してシャクヤクを栽培する中山間地域協働のモデル地区（国・最適土地利用総合対策事業、写真5）となるなど、中山間地域の活性化に助力した。
- ・これらの取り組みにより、富山センター管内における令和6年の栽培面積は約3.3haに拡大した。



写真5 薬用シャクヤクを契機とした中山間地域協働（左から、農業サポーターによるシャクヤク定植・地域神社での花手水）

(2) 切り花シャクヤクの生産拡大・販売力強化

- ・優良種苗導入や生産技術の向上により、生産者数は花き組合設立時の17戸から50戸・組織へ拡大した。栽培面積は約250a（令和6年）、市場出荷本数は、13万9千本となり、市場出荷額は、花き組合設立時の130万円から約1,400万円に拡大した（図3）。

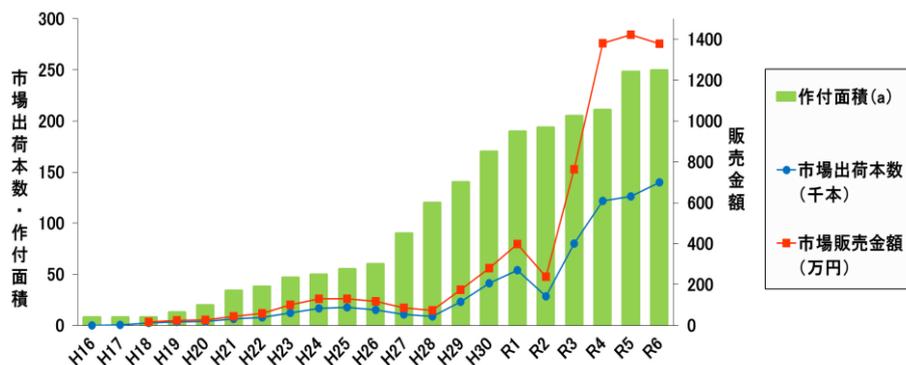


図3 J Aあおば花き出荷組合における切り花シャクヤク生産の推移（作付面積・市場出荷本数・市場販売金額）

- ・簡易ハウス・無加温栽培の導入により、当初5月の1か月間であった出荷期間は前進し、「母の日」需要が見込める4月下旬からの出荷が可能となったことで県内外の市場評価が得られ、豊富な品種数と高品質な切り花が強みとなり、小規模産地ながらも優位販売に繋げている。

4. 農家等からの評価・コメント

あおばの切り花シャクヤクが定着した背景には、160 を数えるバリエーションに富んだ品種と標高差を生かした40日に及ぶ出荷期間の長さがある。小区画の生産者から大区画の法人・営農組織まで各戸に応じた品種の導入と細かな栽培指導があってこそ形成できた産地である。

特に水稻の田植え作業とシャクヤクの出荷時期が重なるため導入に慎重になる主穀作営農組織を勧誘しメリットを示せたことは普及活動の大きな成果である。

組合員が高齢化していくなか、これからを担う若い生産者の勧誘が今後の課題であり、5月のシャクヤクに続く花を導入し、花きによる生産者の定着と収益拡大を目指したい。（JAあおば花き出荷組合・組合長・出町治雄氏）

5. 普及指導員のコメント

富山地区において中山間地域の里山や庭先、あるいはとやまの薬箱の中で、長く親しまれてきたシャクヤクを、地域の特産物として生産開始し、産地化を果たした背景には、生産者・JA・行政ほか関連機関が、課題を共有し、同じ目標に向かって取り組んだ、円滑な連携体制があります。今後も、年々変化する情勢や需要動向に対応するため、スピーディな情報連携と普及活動を心掛けていきたいと思えます。（富山県富山農林振興センター・主任普及指導員・宮崎美樹）

6. 現状・今後の展開等

(1) 中山間地域協働モデルを手本とした薬用シャクヤクの横展開

シャクヤクは、「小区画田への作付けによるスモールスタートが可能」、「省力多収栽培技術」、「高齢者や女性労力の活用」、「鳥獣被害を受けにくい」、「景観や癒し効果の創出」など多角的なメリットをもつ品目であることから、中山間地域の様々な課題に応じて提案を行うことで、生産者の収益性向上や地域活性化（ウェルビーイング）に助力したい。

(2) 切り花シャクヤクの生産拡大に伴う産地体制強化

切り花シャクヤクの生産拡大に対応するため、JA・出荷先市場と連携し、消費地への供給産地型の出荷システムの導入実証（国・ジャパンフラワー強化プロジェクト推進）を行い、令和7年度から運用を開始した。また、産地の強みである優位販売品種の供給体制整備や、中山間関連事業を活用した簡易ハウスの導入拡大により、更なる産地拡大を図っていく。